

# I 自立に向かう子どもたち

一人やものとかかわることを大切にしてい

副校長 井 崎 明

## いま、求められること

本校は平成8年度以来、研究主題「自立に向かう子どもたち」を掲げて研究と実践に取り組んできた。この主題でめざす子ども像を端的に表現すれば「他とのかかわりの中で、自ら考え、自ら判断し、行動できる子ども」ということができる。

この主題が生まれた背景は、一つには社会的な要請があった。それは、当時の中央教育審議会答申や最近の教育改革国民会議報告にも共通している課題意識に代表される。生活体験・自然体験が著しく不足していること、そのために人間関係をつくる力などの社会性や社会における規範意識が育っていないこと、子どもの自立が遅くなっていることなどである。このことは教育改革国民会議報告で「このままでは社会が立ちゆかなくなる危機に瀕している」と記されているほどに深刻な現状にある。また学習面においては、受験競争の過熱化で子どもが自分にとっての本来の学ぶ意味を見失いがちになっていることが指摘されている。

本校の主題もこの課題意識を共有している。これらの改善のために、子どもが身のまわりの自然や社会や人やさまざまな事柄（現象・事象）と直接ふれあうことをよりいっそう重視し、体験の中から自分にとって意味のある問題を発見し、問題解決の道を自己実現の道として歩むことができるような教育の在り方をさぐることが研究主題の趣旨である。

もう一つの背景は本校の研究の流れである。本校の研究を振り返ると、この20年ほどの間は、教科の指導を中心にして、

子どもが問題を発見し → 追究のめあてが生まれ → 自分なりの解決方法を模索し →  
じっくり課題解決に取り組み → 表現し → 振り返る

というプロセスの全体を取り上げ、またはある場面を取り上げ、意欲、学び方、評価、個と集団の関係などさまざまな観点から指導のあり方を研究してきている。この流れの中では、現在の研究主題がめざすものは特に新しいわけではない。主体的に学び、自己のよさを伸ばし、自己実現を図っていくための資質や能力、すなわち自己教育力を育てることがこれまで一貫してめざしてきたことであり、現在の主題でめざしているところでもある。

「自立に向かう」とは、学びの主体として自立していくこと、つまり自己教育力を育てることである。さらに、自分らしい生き方を求めて、自己の生き方を考え、「自分さがしの旅」を歩むことである。自己の生き方を考えること、生き方としての自立がよりクローズアップされているのがこの主題の新しさだととらえることもできる。この主題を求めるために「総合的な学習」を創設したのも、自分自身が自分にとって意味ある問題を見つける、そのために体験を重視する、問題解決・追究の過程を通して自己の生き方を考えられるようにする、といったことを具現化するためである。

## かかわることを大切にす

「自立」とは端的に言えば、自分の行動を自分の責任において自分で決定できることだと言うことができよう。我々の子ども像に言う「自ら考え、自ら判断し、行動できる」ことである。それに加えて我々は「他とのかかわり」を重視しており、今年度はサブテーマにも取り上げている。ここで言う「他」とは自分を取りまくすべての環境、つまり自然環境、社会環境、親や友達などさまざまな人々、社会で起きる出来事などを指している。そして「他とのかかわり」には二つの意味がある。

一つは、学ぶ対象である世界とのかかわりである。我々自身が環境の一部であり、環境に支えられてはじめて我々の存在そのものも成立している。その環境がどのようなものか、環境そのものやここでの出来事は自分とどうかかわっているのか、ということが子どもの学ぶ対象でもある。対象と直接ふれあい、さまざまな活動や体験を通して、対象から直接学ぶ、実感を伴うようなかかわりから学ぶということを大切にしたい。質の高いかかわりによって、自分にとって意味ある問題やめあてが生まれてくる。

もう一つは、共に学び、共に生きる仲間としてのかかわりである。自分の考えを仲間の考えと照らし合わせ広い視点から自分を修正する、といったような相互作用を十分に経た結果として考えを形成していくことが自分で考え、判断することである。その過程でものの見方・考え方の広さに気づき、またそれぞれを大切にすることや思いやりの心が育つ。

佐伯胖氏は、学びは本質的に「対話」であるとして、まず自分自身との対話、つまり自らを振り返り意味づけることが大切である、と言われる。さらに、そのためには「ひとりになること」が大切で、それでこそ他者の立場を内面から理解し他者から「学ぶ」ことが可能となる、と言われる。<sup>註</sup>かかわりで大切なことはこれだと思ふ。かかわり合っている姿としては、外見的には、考えや疑問を出し合う、発表し合う、教え合う、共同で作業をする、声を掛け合う等々、日常のほとんどすべての活動が当てはまる。しかし、質的には、相手を内面から理解しているか、理解しようとしているかという点が最も大切な点である。自分自身の内面を探り自分自身についての気づきもてるようにし、その上で仲間への共感的な理解をもってかかわりや学びあいができるようにしたいものである。そしてその結果、総合的な判断で自分を変えることができなければならない。表面上のかかわりの活動の活発さのみに目を奪われることなく、内面の質を求めたい。

「かかわることを大切にす」というテーマは、上のようなかかわりについて、かかわろうとする意欲、かかわる方法やスキル、相手を心の内面から理解したり共感したり判断したりする力、さらに自分を修正する力などを求めて、かかわりの質を大切にしようとするものである。

## これからの課題

### (1) 「総合」発の指導観の転換

研究主題に迫るための本校の取り組みの一つに「総合的な学習」の創設がある。体験やかかわりの中で自分にとって切実な問題を追究し問題解決の活動にじっくり取り組むことをめざしている。体験的な学習や問題解決的な学習を重視して主体的な学習の仕方を身に付けることは、現行の学習指導要領でも「新しい学力観」のスローガンの下にめざしてきたことである。新しい学力観では、知識の量よりも、自ら学ぶ意欲と思考力、判断力、表現力などの能力を重視した。しかし我々教師はややもすると、過程よりも結果、教えるべき内容、知識や技能の量に気を取られがちな面もあった。その点、「総合的な学習」にはあらかじめ設けられた「内容」はない。「総合」では、追求する課題は子ども個々のものになる。子どもにとっては課題を解決して何らかの結果を出すことを求め

て活動するが、教師側は結果そのものよりもその過程に注目する。問題解決の過程で子どもが身に付けたもの、意欲や成就感、問題の見つけ方、追究の課題としての絞り方、計画の立て方、解決方法の選び方など、学び方に着目して個々に指導に当たらなければならない。そこで結果重視から過程重視へ、教えることから支えることへ、知識から知恵へ、といった指導観の転換に迫られることになった。

この経験を「総合」の中だけにとどめず、教科やその他の領域にも十分に生かすことが課題である。そこで初めて「新しい学力観」もさらに「生きる力」も実現するのではないかと考える。

## (2) 教育課程の評価

研究主題を設けて教育課程を編成し実践してきたが、その成果についての評価という課題がある。

まず評価の前提として、研究主題を生かした教育課程を組むことが実際にできていたかについての評価も必要である。直接体験の内容はどうだったか、体験の場、環境づくり、教材などの構成はどうだったか、発問や助言などの指導方法はどうであったか、などの評価である。

その上で子どもの状況についての評価がある。主題とかかわっては、

- ・自分で問題を見つける力
- ・自分で考え判断する力
- ・計画を立てじっくり課題解決に取り組む力
- ・自分に対する気づきを持つ力
- ・人に共感する力
- ・人とかかわるさまざまなスキル
- ・思いやりの心

等々さまざまな観点からの評価が必要になる。

これらの力の総合されたものが「生きる力」であり学力の基礎・基本、つまり基礎学力であるにとらえられるが、総合的にはどうか。生涯にわたって自立して生きる力につながってきているか。

こうしたことを客観的にとらえる評価を積み重ね、それをもとにさらに教育課程を修正していくということが大きな課題である。

注) 佐伯胖「学び合う力を育てる」 押谷由夫編『豊かな人間性・社会性の育成』教育開発研究所  
1998